

## 多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル ——「対話的モデル生成法」の理論的基礎

やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科  
Yoko Yamada Graduate School of Education, Kyoto University

### 要約

質的研究における「対話的モデル生成法 (DMPM)」の基礎作業の一環として、次の観点から理論的検討を行った。(1) バフチンの対話原理から4つの革新的概念を整理し、特に「対話と差異」「多声性とテキスト」概念と関連させて検討した。(2) バフチンの対話原理をさらに発展させ、筆者の「多声テキスト間の生成的対話」概念を提示した。特に現代思想における「差異」を「生成」に変換する議論をもとに、ドゥルーズの「生成」概念と筆者の「<sup>リニエ</sup>両行」概念、デリダの「差延」概念と筆者の「はなれる」概念を関連づけて考察した。さらに、「多声テキスト間の対話」に関して、クリステヴァの「間テキスト性」「ポリログ」概念とコンピュータ科学の「ハイパーテキスト」概念をむすびつけた。(3) 全体の議論のもとになる世界観と方法論を3つのモデル「ツリーモデル」「リニアモデル」「ネットワークモデル」によって提示し、「多声テキスト間の生成的対話」概念を、ネットワークモデルに位置づけた。

### キーワード

対話、間テキスト性、バフチン、ハイパーテキスト、ネットワークモデル

### Title

**Generative Dialogue of Polyphonic Inter-texts and Network Model: Theoretical Foundation for Dialogical Model Production Method (DMPM)**

### Abstract

For constructing the theoretical foundations of my methodology for qualitative studies named Dialogical Model Production Method (DMPM), following topics were discussed. (1) Four principles of Bakhtin's dialogism were related with the postmodern concepts of "difference" and "polyphonic texts". (2) My concept of the generative dialogue based on the dialogical interaction among polyphonic texts was discussed in the relation with following concepts: "genesis and differentiation", "difference and dissemination", "inter-textuality and polylogue" and "hypertexts in computer science". (3) Three models of thinking and viewing the world, such as "the tree model", "the linear progressive model" and "the network model", were presented. My concept of generative dialogue of polyphonic inter-texts was related with the net work model.

### Key words

dialogue, inter-textuality, Bakhtin, hypertexts, network model

言葉にされた思想だけが他者にとって、したがってまた自分にとって、現実の思想になるとマルクスは言った。けれどもこの他者は、身近な他者（第二の人間である受け手）には限定されない。返答としての理解を求めて、言葉はつねに先へ先へと進むのである。……言葉は、人に聞かれ、理解され、返答され、そしてまたこれに答えるというふうな、尽きることのないやりとりを求める。言葉は対話にくだるのだが、この対話には、意味的な終わりが無い。(バフチン, 1988, p.238)

録音されたヴァージョンが二つの声を、それも一つは男性の、もう一つは女性のものに思われる声を聞こえさせているにしても、だからといって、このポリローグを二重奏 [duo] に、いわんや決闘 [duel] に帰させてしまうには及ばない。実際「もう一つ別の声」という言及は、時には注記なしに耳にすることもあるのだが、しばしば警告を発するという価値を帯びるだろう。それは、二つの声のどちらにも、さらにもっと別の複数の声に声を貸し与えていくことの合図である。(デリダ, 2003, p.23/1987)

## はじめに

本論は、質的研究における「対話的モデル構成法 (Dialogical Model Production Method=DMPM)」（やまだ, 1987, 2002, 2007a）の理論的基礎をつくる作業の一環として位置づけられる。本論の具体的な目的は、対話的モデル構成法のキーコンセプトとなる「対話」概念をとりあげて、対話とは何かを根本的に考えることにある。そして、バフチンの対話概念をさらに発展させて「多声テキスト間の生成的対話」概念を提示し、その概念をより広い「ネットワークモデル」と関連させて明確にする。議論は、以下のように構成される。

第Iには、バフチンの「対話原理」をもとに、彼の対話概念のもつ重要な観点を4つに分けて整理する。

第IIには、バフチンの対話原理の第1, 第2の観点にかかわる革新的意味を、より広い現代思想と関連づけてさらに発展させ、「差異」を「生成」に変換する考え方を示す。特にドゥルーズの「生成」概念、デリ

ダの「差延」概念について考察する。それらを筆者の「両行」<sup>りょうぎょう</sup>「はなれる」概念とむすびつけ、時間・空間的に「はなれる」ことによってズレを生みだしていく、生成・変容・両行プロセスとしての対話という概念、つまり「生成的対話」概念を提示する。

第IIIには、バフチンの対話原理の第3, 第4の観点にかかわる革新的意味を、より広い現代思想と関連づけてさらに発展させ、クリステヴァの「間テキスト性」「ポリローグ」概念とコンピュータ科学の「ハイパーテキスト」概念とむすびつけて考察する。そして「多声テキスト間の生成的対話」概念を提示する。

第IVには、筆者の「多声テキスト間の生成的対話」概念を、より広い世界モデルである「ネットワークモデル」のなかに位置づける。世界モデルとは、認識論（世界の見方）と方法論（世界へのアプローチ方法）の両面にかかわるモデルである。「ネットワークモデル」の提示によって、「多声テキスト間の生成的対話」概念をより明確にできると考えられる。

## I 対話の原理——バフチンを基に

### 1 対話とは？

対話ということばは、日常的にも用いられるが、古今東西さまざまな学問分野を貫いて用いられてきた基本用語であり、学者によって用い方は異なる。ここでは、その歴史的概観をすることが目的ではないので、まずごく簡単な定義をしてから論を始めたい。

哲学的には、「対話 (dialogue)」という用語は、「互いに異なる論理が開かれた場でぶつかりあい、対決を通じてより高められた認識に到達しようとする運動である」と定義される (廣松他, 1998)。「対話」は、ソクラテス、プラトン、アリストテレスなど西洋哲学の成立に決定的な役割を果たし、ヘーゲルやマルクスの弁証法、ブーバーの対話論など多様に展開してきた。

語源的には、「対話」とは、「二つに分離したことば」の意味をもつ。di は、ギリシア語起源で「二つの、二倍の、二重の」、dia は、「分かれる、分離する、運動が逆向きの」を意味する。印欧語では dis (二つに、

離れて apart, 引き離して away, 無, 不, 非, 欠如, 否定, 逆)になる。logue は、「談話」「言説」であるが、ギリシア語の「ことば」を意味する logos (ロゴス, 理法, 神の言) や, -logy 学問 (学説, 教理, 文章, 談話, 話法) と近縁である。

本論では、「対話」を「広義のことばによる相互作用やコミュニケーション」と定義しておきたい。相互作用 (interaction) は、物質を含めてあらゆる現象におこるが、対話は、「ことば」を介した交換である。広義のことばには、表情、ジェスチャーなどの身体表現、音声、映像、描画、建築、都市などのメディアや文化的記号も含まれる。

## 2 バフチンの対話原理における「自己」

バフチンの思想は、「対話原理 (dialogism)」と呼ばれる (Holquist, 1990 ; Todorov, 2001/1981)。彼の思想は、「対話」という考え方を徹底することにより、「自己」「個人」などの基本概念にかかわる古典的なアトミズムの見方を大きく変革したと考えられる。その意味で、バフチンの対話原理は、現代思想の方向性と軌を同じくしていると考えられる。ここでは、本論のテーマである「対話」概念にしばって次の4つの基本的観点をとりだし、バフチン思想のもつ重要な現代的意義を整理した。

第1の観点は、バフチン (1995/1963, 1996/1975, 1988) による自己観の変革である。バフチンは、「自己は単一で同一性をもつ独立した個人」という古典的な見方に対して、「自己は他者を媒介にし、他者との関係性に深く根ざす社会的存在」であるという見方を示したと考えられる。

単一の意識はそれだけでは自足的に存在しえない。私が自己を意識し、自己自身となるのは、ただ自己を他者に対して、他者を通じて、そして他者の助けをかりて開示する時のみである。自己意識を組織する最も重要な行為は、他者の意識 (汝) との関係によって規定される。(バフチン, 1988, p.250)

西洋哲学は伝統的に、プラトン以来、永遠に変わることのない「自己同一性」を存在の原型と見、同一性

を根本原理にしてきた (木田・野家・村田・鷺田, 1994)。そのような古典的自己観に対して、バフチンの自己観は、「他者を媒介にした自己」という概念を根底におくことにおいて、根本的な異議申し立てをするものである。

「自己同一性」概念の基には、アトミズム的な世界観があると考えられる。それは、究極の単位としての「個物, 個人」(individual=これ以上分割できないもの=アトムと同語源) という概念を基礎としており、「独立」(時間・空間・文脈に依存しないで、独立して存在しうる)「同一性・永続性」(見かけの形が変わっても同一性を持ち、時間・空間を超えて連続し普遍的に存在しうる) という概念とむすびついていた (やまだ, 1987 ; やまだ, 2006b)。

バフチンの自己観では、自己を単独で独立しうる単一性と同一性をもつ概念としてではなく、他者の介在や媒介が不可欠である、分裂した存在とみる。つまり究極の単位として「単一」の自己ではなく、ダイアローグの語源にあるように、自己と他者の「二つ (di-)」に分割された自己、差異化された自己を最小単位にするのである。分割できないもの (individual=個人=アトム) を基本におく見方から、分割する (divide) 働きを基本にする考えへの移行は、大きな転換である。

## 3 バフチンの対話原理における「他者のことば」

バフチンの対話原理で注目される第2の観点は、「自己と他者の対話」という概念の変革である。それは、「自己の独語<sup>モノローグ</sup>にみえることばも、隠された対話関係を含めて他者のことばとの対話<sup>ダイアローグ</sup>である」という見方である。

第1の観点では、バフチンの「自己」には、他者が根深く入り込むことが明確になったが、第2の観点では、それだけではなく、「自己と他者が現前の場で互いに向き合い対話する」という対話の基本イメージが変革されたと考えられる。

バフチンによれば、自己がことばを発するとは、自己のなかの他者のことばと対話することである。他者とは、目の前にいる相手をさすだけではなく、「自己の発話の聴衆となる明示されない他者」「自己のなかに住みつき、内的論争をかかわる他者のことば」でもあ

る。この第2の観点において、バフチンの対話概念は、ヴィゴツキー (Vygotsky, 1962/1934) の「内言」とむすびつき、ワーチ (Wertsch, 1995/1991) の「腹話」という注目すべき概念をもたらした。

(隠された対話関係では、) 一方の対話者は目に見えない形で参加していて、彼の言葉そのものは存在しないのだが、彼の言葉の深い痕跡がもう一方の対話者の実在する言葉をすべて規定しているのである。この場合、話をしているのは一人でも、これは対話だと感じられる。しかもきわめて緊張した対話だと感じることができる。それは実在の言葉の一つ一つが、全身全霊を挙げて、不可視の対話者に反応応答し、自分の外に、自分の枠外にある、発せられざる他者の言葉を指し示しているからである。(バフチン, 1995, pp.397-398/1963)

#### 4 バフチンの対話原理における「ことばの対話性と多声性」

ロッジ (Lodge, 1992/1990) は、「バフチンの言語と文学に関する思考法の根本は二項対立的である。彼は何組かの対となる事項—モノローグ的/ダイアローグ的、詩/散文、正典的/カーニヴァルの、等を用いて作業を進める」と批評した。確かに、バフチンの自己と他者観や二項対立的な比較の方法は、古典的な「対話」概念の伝統から完全には脱していないところがある。

しかし、次にあげる第3の観点になると、バフチンの対話原理は、その批判をうけつけなくなる。古典的な「二項対立の闘争」として想定される「自己と他者の対話」という概念が根本的に壊されるからである。第3の観点とは、「ことばの対話性と多声性」であり、対話のことばは、アクセントを含めた他者の「声」を含んでおり、単一の声のようにみえても、ポリフォニー (多声) 的な響きを伴っているという見方である。

バフチンが概念化するのには、モノローグを語る一人の主体としての「自己」と、モノローグを語るもう一人の主体としての「他者」との対話ではない。つまり、単一の同一体としての「自己」と別の単一の同一体としての「他者」の対話ではないのである。また、単一

のことばを語る「自己」と別の単一のことばを語る「他者」の対話でもない。

自己と他者は、相互に「同じことば」「単一のことば」を反復したとしても、そのことばは同じであるにもかかわらず、二つの相反する意味になり、異なるアクセントによって異なるニュアンスをもつことばに変化することが想定されている。ひとつのことばは、多声に分裂した異なる響きを帯び、意味が転換されるのである。

第3の観点からは、先にあげた第1、第2の観点よりも、さらに飛躍した考えが導かれる。第3の観点に立つと、対話するのは、もはや「自己と他者」でもなければ、「内なる自己」や「内なる他者」でもない。「ことば」というものが本質的に「対話性」をもつと考えられるのである。ことばの対話性は、「分裂した多声性」<sup>ポリフォニー</sup>をもち、「同じ一つの言葉を互いに背反し合う様々な声を通して実現する」ことになる。

アリョーシャの発話と悪魔の発話とは、双方とも同じようにイワンの言葉を反復しながらも、その言葉にまったく正反対のアクセントを付与しているのだ。一方がイワンの内的対話のある一つの応答を強調すれば、もう一方は他の応答を強調するのである。……

ドストエフスキーの構想を正しく理解するためには、《他者》としての他人の役割に対する彼の評価を考慮することが、非常に重要である。なぜならその基本的な芸術的効果というのは、同じ一つの言葉を互いに背反し合う様々な声を通して実現することによって達成されているからである。(バフチン, 1995, pp.538-539/1963)

#### 5 バフチンの対話原理における「テキスト間の対話」

第4の観点は、第3の観点としてあげた「ことばの対話性と多声性」をさらに発展させたもので、特にバフチン後期にみられる「テキスト間の対話」という概念である。第4の観点に立てば、人間も「テキスト」という概念で考えることができる。人間は、「広義のことばで語る存在」であるが、「テキストをつくりだす存在」であり、その「テキストとしての人間」が対話

をするのである。

この観点に立てば、テキストは「人間」の形をとる必要は必ずしもなくなる。つまり「テキスト」自体が対話すると考えることができる。「テキスト間の対話」という概念は、第1の観点としてあげた単一の自己を超え、第2の観点としてあげた自己と他者の対話という概念を超え、第3の観点としてあげたことばの多声性という概念を超えうる。つまり、自己や他者という概念はもちろん、生身の人間の声さえも必要とせず、テキスト自体がテキストと対話する、あるいはテキストがテキストを超えて対話しうるのである。

バフチンは、自然科学とちがって人文科学はテキストの学であるとも述べている。自然科学の対象が事物、つまりマテリアル（物質）やデータ（事実、資料＝与えられたもの）であるのに対し、人文科学の対象は、テキスト（記号の複合体＝織りもの）であると考えられるだろう（やまだ、2007a）。

この第4の観点「テキスト間の対話」という概念は、バフチンの後期の概念であり、前期の対話概念と一貫しているともいえず、十分な具体性をもって発展させられたとはいえないが、非常に重要な考えではないかと思われる。

人文研究の思考すべての一次与件としてのテキスト（書かれたテキストおよび語られたテキスト）。これらの学問や思考が唯一よりどころとする直接的現実（思考と体験の現実）は、テキストである。テキストの存在しないところには、研究と思考の対象も存在しない。

テキストという言葉で想定されるもの。テキストを広義に解釈して、すべての脈絡ある記号の複合体と考えるならば、芸術学（音楽学、造形芸術の理論と歴史）も、テキスト（作品）を相手にするといえる。思考についての思考、言葉についての言葉、テキストについてのテキスト。この点に、われわれの学問である人文科学と自然科学（自然にかんする学問）との根本的ちがいがあがる。（バフチン、1988, p.194）

自然科学では、主体をもたない客観的なシステムとして研究されるが、人文科学の対象は、事物ではなくテキストであり、テキストの生産者としての人間である。人は、その本質において語る存在であり、テキストをつくりだす存在であるか

ら、モノ扱いすることでは、人間に迫ることはできない。……

モノの描写と、（本質において語る存在である）人間の描写。リアリズムはしばしば人間をモノあつかいするけれども、それでは人間に迫ることができない。人間の行為や思想（彼が世界のうちにしめる意味的な立場）を因果論的に説明しようとする自然主義は、さらにいっそう人間をモノあつかいする。リアリズムの特徴とされる「帰納法的」なアプローチは、本質において、人間をモノとしてあつかう因果論的な説明なのだ。声（物質化された社会的スタイルとしての）はその場合、たんにモノの特徴（あるいは過程の特徴）を示すものになってしまう、もはやそれに答えることも、論争することもできない。そのような声に向きあうとき、対話的な関係は終わる。（バフチン、1988, p.210）

## II 生成的対話

### 1 同一性と差異——バフチンの対話原理の現代思想における位置づけ

バフチンの対話原理は、現代思想の方向性と軌を同じくしていると考えられる。たとえば、第1と第2の観点は、伝統哲学の同一性原理に対して、「他者」「差異」「生成」を重視する現代哲学の根本議論（木田他、1994；廣松他、1998 など）につながると考えられる。

プラトン／アリストテレス以来、西洋哲学は、イデアや実体、根源など、永遠に変わることがない普遍性と自己同一性を存在の原型と見てきた。この立場では、非同一的なもの、生成変化するものは仮象とされ、異質なものは排除される。同一性原理のもとでは、自然も生成力を奪われ、無機質・等質的な物質＝材料（マテリア）に貶められる。

それに対して現代思想では、同一性よりも「差異」のほうを根本原理とみなし、同一性原理を厳しく批判し価値転換してきたといえよう。たとえば、現代思想への転換点に位置するニーチェ（Nietzsch, 1993/1901）は、永遠にとどまる「真の世界」に対して、たえず現在よりも強く大きく生成しようとする差

異化と生成を考えた。

「主観」、「客観」、「述語」—こうした分離がでっぴあげられており、現今では、図式としてあらゆる見せかけの事実のうえに覆いかぶさされている。或るものに働きかけ、或るものの働きを受け、或るものを「所有」し、固有性を「所有」しているのは私であると、私が信じているのは、根本的に誤った見方である。(ニーチェ, 1993, p.80/1901)

「主体」は、なんら結果をひきおこすものではなく、一つの虚構にすぎないということがわかってしまえば、引きつづいてさまざまなことがわかってくる。……私たちがもはや結果をひきおこす主体を信じないなら、結果をひきおこす事物も、私たちが事物と名づけるあの諸現象の間の交互作用、原因と結果も、また信じられなくなってしまふ。……

私たちが「主体」と「客体」という概念を放棄すれば、「実体」という概念もまた放棄される—たがってこのものささまざまな変様、たとえば「物質」とか「精神」とかその他の仮説的本質、「質料の永遠不変性」などもまた。私たちは質料性を放棄する。(ニーチェ, 1993, pp.86-87/1901)

現代思想における「差異」の強調のしかたは、多様で入り組んでいる。ここではごく簡単に3つの方向に分けてみよう。

1つ目の方向は、存在概念のなかに「時間」的性格を入れて、差異を「生成プロセス」と関連づけて理論化する方向である。

2つ目の方向は、同一性原理が「実体論」と連結することを批判して、関係概念に変えるものである。たとえばソシュール (Saussure, 1972/1922) は、言語を現実の事物や実体を指し示すものではなく、記号としての「差異の体系」と考え、構造主義と記号論をもたらした。

3つ目の方向は、同一性原理が「普遍性」を強調するのに対し、「多様性 (diversity)」, つまりローカリティや多民族性や多文化性を強調するものである。同一性原理が、異質なもの (異民族, 障害者, 女性など) を差別し排除する社会システムとして「権力」作用をもちやすいことを批判し、差異による多価値の共存や

権力の逆転を主張する。

バフチンの対話原理は、一般的に第3の方向とむすびつけられやすかったと思われる。しかし、彼の考えは「差異」を強調する3つの方向性のどれにも呼応し、発展させられる可能性がある。本論では、バフチンの対話原理を発展させる方向のひとつとして、「差異」を「生成」につなげる、1つ目の方向を重視して考えてみたい。

## 2 差異と生成

先に検討したように、バフチンの対話原理は、同一性や普遍性に対して「差異」を重視する現代思想に共通する方向性をもつ。そこで次に、なぜ「差異」が「生成」概念にむすびつくのかを考えてみたい。「差異」が「生成」に変換されることによって、筆者の「生成的対話」という概念が生まれるからである。

差異と生成との関連は、時間概念を入れることによって理解できる。たとえばハイデガー (Heidegger, 2003/1927) のテーマは、「存在と時間」であった。つまり、彼は時間的過程をみることによって、存在=自己同一性=現前性と見るプラトン/アリストテレス以来の伝統を解体したのである。「存在」を時間とむすびつけることによって、「生き生きとした現在」のうちにズレ (差異化) が起こり、通常「過去」とか「未来」と呼ばれる次元が開かれ、それらの次元のあいだに複雑なフィードバックが起こることによって可能になるといえよう。

ベルグソンもまた、ハイデガーに先立って、「持続」という名のもとに、時間のもつ差異化の過程の根源性を主張した。ベルグソンから出発したドゥルーズ (Deleuze, 2000/1956, 1992/1968, 2007/1969) は、「差異と反復」による生成の哲学を考えた。

他方、デリダ (Derrida, 1977, 1983/1967a, 2005/1967b, 2000/1972) は、フッサールの現象学の批判的読解から出発した。彼は、「純粹意識」を拠点とするフッサールの「声と現象」も、同一性と現前性による形而上学の一様態にすぎないと批判し、「差延」という概念で、ことばの時間・空間的な差異化を考えた。

本論では、筆者の「生成的対話」概念を提示するために、ドゥルーズの「生成」概念と、デリダの「差

延」概念を基に議論してみたい。ただし彼らの思想の全体像を示そうというのではない。筆者の「両行」<sup>りょうこう</sup>「はなれる」概念と関連づけた議論に有用と考えられる上記の概念のみに限って、ここで議論するのである。

### 3 ドゥルーズの「生成」概念

ベルグソンが〈質〉の哲学者であることは、久しい以前からの世の通念であったが、個物における〈質〉が、じつは、関係においては〈差異〉に外ならないことから、ベルグソンが徹底した〈差異〉の哲学者であることを論証したのは、ドゥルーズの読みの卓抜さである。(ドゥルーズ, 2000, p.138/1956)

ドゥルーズは、ベルグソンの持続と生成の哲学を、「差異と生成」の哲学に読み替えた。その考えは「差異そのものが存在し、この差異は新しさとして実現される」(ドゥルーズ, 2000, p.125/1956) というしめくくりのことばに要約されるだろう。

このことばは、何を意味するのだろうか。たとえば、「子どもが大人になる (L'enfant devient l'homme)」という表現を考えてみよう。この文章は、「子ども」、「大人」どちらを主語にしても、ありえない想像上の停止期を基にしている。本来は、「子どもから大人への移行がある (Il y a devenir de l'enfant à l'homme)」と言うべきだろう。つまり、同一原理(名詞形)を基にものを考えるのではなく、差異化と変化のプロセスをあらわす動詞形で考えるべきなのである。

「自己に対して差異を生じる持続」としての「生成」とは、筆者のことばにすれば、「昨日の私は、今日の他人」と言い換えられるだろうか。今日の自己は、昨日の自己と差異が生じている(したがって、自己ではなく他者といってもよい)。自己は、たえず差異を生じながら持続しているのである。

さらにドゥルーズの考えで特記すべきだと思われるのは、「対立物の否定」、「矛盾の闘争と止揚」という弁証法的見方を批判し、「差異あるものの肯定的隔たり」を考えたことである。

ヘーゲルの弁証法のように、対立物の止揚により上位へ統合し、結局は単一方向の同一性に至る考えは、筆者のいう「リニア・プログレッシブ(線形上昇)」

の見方である(Yamada, 2004, 本論の「IV リニアモデル」を参照)。

二項の対立と統合を基礎におく考えは、心理学においても根強い。たとえば、エリクソン(Erikson, 1977, 1980/1950, 1959)は、彼のライフサイクル論において、「基本的信頼 vs. 不信」など対立項の葛藤から生じる上位の力(「希望」など)を考え、老人期の最後には、その最終的な統合として「統合 vs. 絶望」対立による「知恵」をおいた。

バフチンの対話概念は、ヘーゲルを批判しているので、必ずしも上位の統合をめざしていない。しかし、その「対話」の基本は、「脱中心化」「論争」「闘争」「闘いのアリーナ」にある。対立、対抗、闘争、否定による相対化と価値の逆転は、弱者の価値逆転に有効な理論になる。特に、それが社会批判や現実変革や「民衆の笑いの解放力(桑野, 2002)」の起爆剤になる意味は大きい。

しかし、弱者がエンパワメントして権力を逆転しても、「力関係」で成立している関係性の枠組み自体は変わらない。したがって、闘いメタファーから離脱できない可能性があるだろう。

ドゥルーズ(2000/1956, 1992/1968, 2007/1969)の「否定や排除なき差異」「差異あるものの肯定的な隔たり」の概念では、差異や隔たりは共に肯定され、「差異化・分化(differentiation)」として生成される。闘争、否定、排除という概念自体が、無化され徹底してとりのぞかれるところが興味深いのである。

### 4 「生成」と「両行」<sup>りょうこう</sup>

ドゥルーズの「否定や排除なき差異」「差異あるものの肯定的な隔たり」の概念は、筆者が理論化してきた荘子の「両行」<sup>りょうこう</sup>概念と通底する考えである(やまだ, 1995; Yamada & Kato, 2006b; やまだ, 2007b)。「両行」とは、「二つながら行われていくこと」であり、矛盾と多様性の同時存在、矛盾したものが共存し、併行してなされていくことを表す。

ただし、ドゥルーズは、二者の隔たりと差異を「二つの項を同時に含む潜在性」という抽象度の高い持続概念に統一しようとする。それは、荘子が「両行」の基に「道」という概念をおいたことに似ている。それ

に対して筆者は、あくまで「二つの隔たり」のままの現実相でものを考えていきたいと考えている。

「両行」は、「アンビバランス」（二つの価値の葛藤、二つの対立する方向へ引き裂かれる）概念と区別すべきである。葛藤は起こらず、二つながら行われていく、二つながら肯定されるからである。

「両行」は、「陰陽思想」とも区別すべきである。陰陽思想では、陽と陰は対立的かつ相補的で、いつまでもたっても止揚も統合も起こらず、絶えず転換する運動が生起しつづける。しかし、「陽」が肯定的で「陰」が否定的価値をおびることは変わらない。真の意味で価値逆転はなく、全体としては旧システムが反復され存続するのである。対立しているようにみえる二つの概念は、同一システムに支えられている。

「両行」は、単なる相補性ではなく、闘争的な転換も起こらない。ひとつのものに同時に二重化した複数価値を与えることによって、ものの見方を変え、その価値を無化したり反転したりすることで、価値の枠組み自体を変えるからである。

ヘーゲルにしたがえば、事物は自己との間に差異を生ずるが、それはまず自己ではない一切のものとの間に差異を生ずるからであり、かくて差異は矛盾にまで行く。……

われわれは、持続が、まず相反する二つの限定の産物であるゆえに、自己との間に差異を生ずるのだ、と思いこんで、それが、まず自己との間に差異を生ずるものであったからこそ分化したのだ、ということをおぼえてしまっていた。……否定なき差異の概念、否定を含めぬその考え方に到達すること、これこそベルグソンが最も力をつくしたところである。……彼は、現実の或る項の別の項による否定は、これら二つの項を同時に含む潜在性の積極的な実現に外ならないことを示そうとこころみている。「この場合、闘争とは進歩の表面的な相にすぎない。」……二つの項の対立はそれらを二つながら含んでいた潜在性の現実の外ならない。差異は、否定よりも矛盾よりも深いということである。（ドゥルーズ、2000、pp.69-73/1956）

一般に同一性によって、対立するものは同時に肯定される。その際には、対立するもの的一方が深められて他方が見出されたり、対立物の総合へと高められたりするわけである。反対に、われわれは、二つの事物や二つの規定を両者の相異によ

って肯定する操作について語っている。……もはや反対のもの同一性は、まったく重要ではない。それは、依然として否定的なもの排除の運動から切り離せないからである。差異あるものの肯定的な隔たりが重要である。すなわち、二つの反対のものを同じものに同一化することではなく、両者の隔たりを、両者が「差異あるもの」である限りで相互に関係させるものとして肯定することが重要である。……

ニーチェは、健康が病気に対する生ける観点になり、病気が健康に対する生ける観点になるように、健康と病気を生きることを勧める。病気を健康の探検とし、健康を病気の探検とすることである。（ドゥルーズ、2007、上 pp.299-301/1969）

ドゥルーズの見方と筆者の「両行」概念から見ると、問うべき問題が「因果関係」から「出来事の交流」へと変わる。「出来事」は、因果関係や手段目的関係ではとらえられない、必然性と偶然性の交差点で生起する。ある出来事はなぜ反復され、何が出来事を「二つながら行わせる」「共立可能」にするか、その分離（はなれる）と連結（むすぶ）の関連、非論理的な反響と共鳴を含めた生成のしくみが今後問われるべき課題になる。

ストア派の思想で最も大胆なものの一つは、因果関係の切断である。……

問いはこうなる。出来事相互の表現的關係とは何か。出来事の間においては、共立可能性と共立不可能性という無音の外圧関係、連結と分離という外在的關係が形成される……。ある出来事が別の出来事とその差異にもかかわらず反復すること、人生が人生に到来するものの多様性にかかわらず（唯一の同じ出来事）で創作されていること、唯一の同じ裂け目が人生を横切っていること、人生があらゆる可能な旋法で、唯一の同じ曲を演奏していること、こうした運命を作るものは、どうであろうか。運命を作るものは、原因から結果への関係ではなく、原因性ではない対応關係の集合である。この集合は、反響・再演・共鳴のシステム、サインのシステムを形成する。……

要するに、出来事相互の關係は、……先ずは、原因性ではない対応性、非論理的な共立可能性や共立不可能性を表現するのである。この道に踏み入ったことがストア派の強みである。いかなる基



準によって、出来事は、交接するもの、運命を共にするもの（あるいは、運命を共にしないもの）、連結するものや分離するものであるのか。（ドゥルーズ、2007、上 pp.294-296/1969）

## 5 デリダの「差延」概念

デリダも、大きくみれば生成を重視するニーチェの系譜に属するが、ドゥルーズとは異なる基盤に立つ。ドゥルーズが分岐と分化を重視し、分裂的な多様体であるリゾーム（根茎）的生成（Deleuze & Gattari, 1994/1980）に向かったのに対して、デリダは、ヨーロッパ思想の伝統的「構築物」と対峙し、「脱構築」という名の責任＝応答を引き受けて、ことばにこだわる。彼は、フッサールの現象学「声と現象」から出発し、「現前なるもの」の同一性、根源性、超越的主観性を徹底的に批判した（デリダ、2005/1967b）。

デリダは、アフリカの植民地出身で、フランス語という「たった一つの私のものではないことば」（デリダ、2001/1996）で考えたり書いたりせざるをえない二重文化・二重言語性から、自他の「隔たり」と「差異性」について考えたのである（デリダ、1997、1983/1967a）。

デリダは、「差異（difference）」と区別して「差延（différance）」という新しい概念を提出した。差延は、差異を生み出す運動である。このことばは、「延期する」と「異なる」という意味を兼ね、時間的待機（temporisation）と空間的な間隔化（espacement）を二重にあらわす。

なお、「差異する」を表す differ は、もとのラテン語では dif-（対話を構成する di- の変形形で、分離する、区別する、相違する）+ferre（運ぶ）を意味し、「区別する」「分離する」などの他に、「延期する」という意味もある。デリダの用法は特異にみえるが、本来の語源的意味に戻っているともいえるだろう。また、dif- は、対話を構成する di- の変形形であるから、差異と対話という概念は、西欧語ではもともと近縁であり、「二つに分離する」という概念は、バフチンにとってもデリダにとっても、根本的な思考原理となっている。

デリダ（2000/1972）によると、差延は、遅延、代行、猶予、差し向け、迂回、遅滞、留保などの運動で

ある。これらは時間と空間を対立させつつ、空間は時間へ、時間は空間へと相互に位置ずらし（déplacement）を行い、変形させていくテキスト操作であり、移動する動きである。

間隔化<sup>エスペサシオン</sup>というのは、産出的な、積極的な、生み出す力という意味をも含んだ……概念である。散種と同様に、差延と同様に、間隔化<sup>エスペサシオン</sup>はある発生論的なモチーフを含んでいる。それは単に二つのもののあいだの隔たり、すでに開けられたすき間なのではない。……そうではなく、それは隔てる操作、もしくは隔てる動きなのである。この働きは、待機一時間化および差延から分離できないし、差延において働いている諸力の争いから分離できない。この働きは、自己から隔てるものを標記<sup>マルク</sup>し、自己との同一性、自己への一点的な集中、自己との同質性、自己にとって内的であること、こういったことをことごとく妨げるものを標記する。（デリダ、2000、p.169/1972）

「差延」は、話しことばで発音すると「差異」と同じだが、書きことばで文字化されると区別される（英語では difference に対して、différance と表記される）。したがって、「差異」の意味を保持しつつズレをはらみ二重の意味をおびる。

このように、デリダが思想の基本におくのは、現前の主体に依拠するパロール（話されることば）よりも、文脈から離れて移動していくエクリチュール（書かれることば）である。

パロール（声）は、発話主体を維持するから同一性の論理が働く。それに対して、エクリチュール（文字）は、発話主体を引き裂き二重化していく。つまり、パロールは、今ここで話す現前の主体が発したことば、発話主体のものとして所有されうるが、エクリチュールは、その統御からすり抜け、差異化され、みずから変容していくのである。

デリダは、ひとつの同じエクリチュールが同一性を保証するどころか、複数の異なるコンテキストに移されることで、多種の意味を生成する「引用可能性」に着目する。同じことばは反復されるが、同一ではない。ことばは反復されるたびに、異なるコンテキストに置かれて意味のズレを生じるからである。反復が、同一性ではなく差異を生み出すのである。引用は、反復す

ることで純粋性と単一性を断絶し、移動することでコンテキストから離れていくのである。

## 6 「はなれる」ことと「生成」

デリダは、「差延」をさらに先鋭化させた「散種 (dissémination)」という用語も用いる。散種 (dis/sémination) の dis は、対話の di と同意味で「二つに、離れて」を意味するが、動詞につけると欠如、否定、逆など「非、不、無」なども意味する二重意味の接頭語である。sémination は、ラテン語起源で、種まき、流布、精子を意味するが、seminal (生産的な、発達の可能性をもった)、semi- (半、部分、未完) とも類縁する。もう一方で、このことばは、ギリシア語起源の semiotic (記号の、意味ある) と似ているので、「意味、記号」という意味も呼びおこす。

「散種」は、コンテキストからの分離や断絶力をより強調すると共に、意味と生殖を関連づける発生的概念である。それは、記号の「二重意味=二重所属性」と、「種子=精子」の意味を持ち、移動して「種をまき散らす」拡散的で乱用的な働きも意味する。

たとえば「引用可能性」は、記号や発話をその本来のコンテキストから抜き取り、また別のコンテキストへと転移して接木する、変異の可能性をあらわしている。

引用可能性は、コンテキストを超えた記号の同一性を保証するのではなく、その同一性を脅かす。war が英語で「戦争」、ドイツ語で「存在する」を意味するのは、多義性 (多意味 poly/sémie) にすぎない。それに対して、散種 (二重意味 dis/sémination) は、引用可能性 (任意のコンテキストからの切断可能性) によって、ひとつの同じエクリチュールが複数の異なるコンテキストのあいだを移動する (東, 1998)。

ある一つの「テキスト」を読むとは、その「テキスト」が差し向けていく他の無制限な「テキスト」の群を常に予想することであり、言いかえればそれら「テキスト」をたがいに「結び直す」(relier) ことである。それぞれの「テキスト」はそうした無際限な差し向け連関のうちにあるから、いずれの「テキスト」も再一現前 (représentation) の場面であって、端的な現前性

(présence), すなわち最終的な帰趨項が、フッサー流に言えば「原的に」「生身のありありとした」姿でそれ自体において、出会われるといった現前性の場面は、ついにどこにおいても見いだされない。これはつまり、この審級においては現前性/再現前性という概念的対立はもはや通用しないことを意味する。だから、一つの「テキスト」を読むとは、その「テキスト」をいわば「再一現前」として読むということであり、そういう意味でそれは再一読すること、読み直す (relier) ことである (relier は relire のアナグラム)。(デリダ, 2000, 高橋訳注 p.182/1972)

デリダは、フッサーが基本においた現前の「声 (phone)」を遠隔化 (tele) した「電話 (telephone=遠くの声)」や「郵便」や「亡霊 (ルーブルマン=帰り来るもの)」という用語も使っている。彼の思想は、「今ここに現前する声」「ありのままの自然」「純粋な直感」「主体の同一性」などというものはあるだろうかという問いをなげかける。彼の用語は、私たちのコミュニケーションが必然的に媒介を通して遠隔化されズレのある反復をすること、その「隔たり」と「不完全な伝達」によって、多声的に生成されることを語っている。

「テレフォン」は、主体が自らの同一性を維持するために用いる「自分が話すのを聞く」回路 (「声一意識」) につねに媒介性や他者性が侵入していることをあらわしている。後期デリダは、非世界的存在 (不可能なもの) をとらえるために「郵便」の隠喩を重視している。不可能なものはネットワークに宿る。それゆえ声一意識の回路が純粋のままではいられないのは、そこにつねにネットワークが侵入しているから。生きた身体につねに諸メディアが接合されているからである。(東, 1998, p.164)

エクリチュールとは結局、情報の不可避的かつ不完全な媒介のことだと考えられるだろう。情報の伝達が必ず何らかの媒介 (メディア) を必要とする以上、すべてのコミュニケーションはつねに、自分が発信した情報が誤ったところに伝えられたり、その一部あるいは全部が届かなかったり、逆に自分が受け取っている情報が実は記された差出人とは別の人から発せられたものだった

り、そのような事故の可能性にさらされている。デリダが強く批判する「現前の思考」とは、その種の事故を最終的に制御可能だとみる思考法を意味している。逆に、コミュニケーションについてのデリダの基本的なイメージは、その種の事故の可能性から決して自由になれない「あてにならない郵便制度」だといってよいかもしれない。(東, 1998, p.83)

デリダが強調する「差延」による遠隔化や遅延によるズレやズラシ、「散種」によるコンテキストからの断絶やまき散らし、そこで生まれるコミュニケーションの媒介性や不完全性は、ことばによる伝達が本質的にはらむ特徴である。この媒介性や不完全性は、通信モデルの情報伝達論に基づけば、完全情報からの損失をもたらすマイナス要因であろうが、「差延」や「散種」概念では、これこそが発達的な生成概念となる。引用可能性の自由度を増し、新たな多声的生成を産むからである。

筆者が『ことばの前のことば』で重視してきたのは、ことばの働きがもつ「距離化」と文脈からの「離脱性」、つまり「はなれる」という働きである(やまだ, 1987)。ことばがもつ遠隔作用、つまり現前から時間的・空間的に隔たること、もとの文脈から離れることが、新たなむすびつきを産み出す生成概念となることが重要だといえよう。

デリダは、ことばが時間的・空間的にズレをもって再現されることによって、自由度をもち、ことばがまるで生きもののようにコンテキストを脱して移動し、新しい多重の意味がポエティックな響きで、多声的に生成されていく実験的なテキストをつくっている(デリダ, 2003/1987 など)。彼は開かれた生成的テキストの不思議で魅惑的な働きそのものを記述しようと試みている。それは、筆者が「ズレのある反復」「かさね」「はなれる」「むすぶ」働きと呼んできたものと呼応する。

デリダのテキストの概念は、書かれたものというよりも、「生きもの」のようなものである。それは「生きもの」であるが、遺伝子による伝達や生殖による出産がそうであるように、まったく新しいオリジナルではありえない。もとのテキストは配列を変えて、引用され、再び差異をもって反復される。

このようにテキストは、もとのテキストから読み直し、語り直し、結び直されていくものであるから、「生成的対話」を交わしているといってもよいだろう。「生成的対話」において重要なことは、名詞的概念ではなく、動詞的概念であり、何かを生みだしていく移動の動き、変化プロセスを意味することである。生成的対話では、絶えず二つに分離され、意味が二重化され、もとの文脈から移動していく「はなれる」働きと、分離したものが再び「むすび(結び・産び)」つく働きが、「両行」して二つながら行なわれていくと考えられる。

### III 多声テキスト間の生成的対話

#### 1 生成するテキスト

デリダの「差延」「散種」の概念は、のちに示すクリステヴァの「間テキスト性」概念、そして「多声テキスト間の対話」としての「ポリログ」という概念につながり、バフチンの対話原理を超えた現代的意味をもつと考えられる。

バフチンが生きた時代のテキストは、ドストエフスキーの小説のようなものであった。そこでは、ドストエフスキーという「作者」がいること、そして登場人物も、たとえフィクションであっても、たとえば「地下室」という下部の暗闇にリアルに「存在」する人間が「自己」をもつことは疑われなかった。

現代を生きる私たちのテキストは、カフカの小説のようなものである。カフカ(Kafka, 1962)の小説では、自己の同一性は崩れ、差異化によって変化し、ある朝起きたら同じ部屋にいるのに、理由もなく自己が見知らぬ虫に「変身」してしまう。そこでは、「作者」も「主人公」もなくなって形を喪失し、残されるのは、いつまでたっても目的の「城」に到達できないで、反復し循環し移動しつづけるテキストそのものになる。

下記のデリダ(2003/1987)の文章では、「テキスト」自体が生きもののように呼吸し、移動し、対話するかのように扱われている。デリダは、「ここに灰がある」というたった一つの<sup>エクリチュール</sup>文について語ってい

るのだが、そのたった一つの文の意味さえ、(テキストの「作者」である) デリダが所有することも、制御することもできない。それは、「たった一つの私のものでないことば」である。それは、勝手にきて去り、そしてまた「幽霊」のように反復してやってくる。

ここでは、もはやつくりだす働きをするものは、全知全能で全体を統御できる「神」でないことはもちろん、意図をもつ「主体」や「自己」や「作者」でもなく、それ自体が生成的な機能をもつことばの織物としての「テキスト」である。そして、つくりだされるものも、輪郭と境界をもつ「世界」や「客体」ではなく、はじまりもおわりも縁も定かでない生成しつづける「生きたテキスト」である。

十五年以上も昔になるが、一つの文が、望んだわけでもないのに、わたしのところにやってきた、というより、むしろ立ち戻ってきた。それは、独特で、特異なまでに短く、ほとんど無言だった。

この文を、自分では周到にすべて計算しつくし、制御し、従わせることに成功したつもりだった。あたかも永久に自分のものにしたようなつもりになっていた。

ところがそれ以来、わたしは次の明白な事実を認めざるをえなくなる。すなわち、この文は、これまでだれの許可も必要とせずにやってきたし、わたしがいなくても生きてきたということである。……

十年近くにわたって、この幽霊は征きては戻り、亡霊 [= 帰り来るもの *revenant*] は、思いがけず訪ねてきた。このものはただ自分だけで語っていた。わたしの方がそれに対して釈明せねばならず、それに答ええないしはそれを引き受けねばならなかったのだ。……

わたしは、複数の声からなる対話<sup>ポリローグ</sup>というジャンルをもじって、発音することの不可能にみえる会話をつくってみた。だがじつはそれは、いうなれば声に、しかも複数の声に呼びかけるエクリチュールで成り立つ装置だったのである。(デリダ, 2003, pp.13-15/1987)

## 2 間テキスト性

今までの議論やデリダの引用を介して、議論は単な

る「生成的対話」概念を超えて、すでに「多声テキスト間の生成的対話」概念の中核へと踏み込んでいる。

しかし、ここでもう一度、Iにおいてバフチンの対話原理として第3、第4にあげた観点まで戻ることしよう。そして、バフチンの考えを、現代人文学や社会科学で共通に使われるようになった「テキスト」概念や「テキスト間の対話」(間テキスト性) 概念と関連づけるところから始めてみよう。

クリステヴァ (Kristeva, 1983/1969a, 1984/1969b, 1985/1970) は、バフチンの対話原理を、記号学やポスト構造主義にむすびつけて「間テキスト性」へ発展させた。間テキスト性 (*inter-textuality*) は、テキスト間の対話を意味し、相互テキスト性とも訳される。

彼女は、テキストを記号の静的構造に閉じない「意味生成装置としてのテキスト」「意味を生産する実践」(西川, 1999) と考えた。それは「さまざまな言表のタイプを突き合わせ、広げ、鋳直し、現実を変革する、多元的で、多言語的で、多声的なテキスト」(クリステヴァ, 1983/1969a) であり、対話的テキストである。

バフチーンは、もろもろのテキストの静態的な切り分けに替えて、文学の構造が存在しているのではなく、むしろそれが別な構造に照らされて形成されていく、そういうモデルを立てた最初のひとりである。……その捉え方からみれば、「文学の言葉」はひとつの点(固定した意味)ではなくて、いくつものテキストの表面の交錯、いくつもの文章<sup>テクニカル</sup>が、すなわち作家、受け手(すなわち登場人物)、当時のあるいは先行する文化のコンテキストが交わす対話となる。(クリステヴァ, 1983, p.58/1969a)。

テキストは、「端的な情報を目指す伝達的な言葉(パロール)を、先行の、もしくは共時的な、多種の言表類型と関連づけることによって、言語(ラング)の秩序を配分し直す超-言語的装置である(クリステヴァ, 1985/1970)。「テキストは諸種のテキストの相互置換であり、テキスト間相互関連性[間テキスト性] (*inter-textualité*) である。すなわち、一テキストの空間においては、他の諸テキストから取られた多様な言表が交差し、かつ相互に中和し合うことになる。」

水平の軸（主体－受け手）と垂直の軸（テキスト－コンテキスト）は合致しているのであって、その結果一つの重要なことが明らかになる。それは、言葉（テキスト）はいくつもの言葉（テキスト）の交錯であり、そこには少なくとももう一つ（テキスト）が読みとれる、ということである。それにバフチンはこの二つの軸を、それぞれ対話および対立するものの併存（ambivalence＝アンビバレンス）と呼ぶのであるが、明確には区別していない。しかし、この厳密さの欠如は、むしろバフチンによって文学理論の中に初めて導入された発見を示している。すなわち、どのようなテキストも様々な引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もう一つの別なテキストの吸収と変形に他ならないという発見である。相互主体性という考え方に代わって、相互テキスト性（intertextualité＝テキスト連関）という考え方が定着する。そして詩的言語は少なくとも二重のものとして読みとれる。……

言葉は対話を交わしている意味要素の集合としてあるいは対立しながら併存している要素の集合として、三つの次元（主体－受け手－コンテキスト）において機能している。それゆえ、文学記号論の課題は、テキストの群が交わす対話空間のなかでの言葉の（シーケンズの）さまざまな結合の仕方に対応する形式表現を見出すことになるであろう。（クリステヴァ、1983, pp.60-61/1969a）

テキストは、他のテキストと相互連関し、引用のモザイクとして構成されるから、それ自体で間テキスト性をもつ。間テキスト性とは、多元的で、多言語的で、多様で、多声的なことばが相互に交差し、つきあわせ、広げ、鋳直し、相互置換する対話空間である。間テキスト性は、相互に配置換えし、転移（transposition）し、秩序を配分しなおすことによって、「生産」「意味産出」の働きをする。

たとえばクリステヴァ（1984/1969b）は、有名な詩を否定的パロディにした詩を分析し、「別のテキストを肯定し、かつ否定するという同時的で複雑な活動」による二重化が行われていることを示した。二つの句が単に同時的に結合されるだけでなく、むすびつけること自体が、メタ的なテキスト間の対話となり、批評作用をするのである。このような間テキストの働きは、バフチンの第3の観点である多声的対話「同じ

一つの言葉を互いに背反し合う様々な声を通して実現する」「論争しているのは、二つの首尾一貫したモノローグ的な声ではなく、二つの分裂した声」と深く呼応するものである。

間テキスト性は、間主体性（inter-subjectivity）という概念が、「主体」や「主観」という伝統概念を批判しながら、依然としてそれらの概念を基礎に成立する用語であるのに対して、主体、主観、自己などという古典的用語に依存しないで、新しい概念を提示しようという意味で、画期的な用語である。本論においても、この用語をさらに発展させるかたちで、「多声テキスト間の対話」を考えていきたい。

多声テキスト間の対話という概念は、古典的な「二項対立」と「同一性」概念を引き継ぐヘーゲルの弁証法的な対話概念を超えようとするものである。つまり、「対立を止揚して最終的に同一性へと統合される対話」ではなく、「差異化、生成、多様化が生成されるプロセスとしての対話」を重視するのである。クリステヴァのことばを借りれば、次のように要約できる。

対話関係は、ヘーゲルに負うところがきわめて大きいですが、しかしヘーゲルの弁証法と混同されてはならない。ヘーゲルの弁証法は三項関係を、したがって闘争と止揚（乗り越え）を前提としていて、実体と原因に土台を置くアリストテレス的伝統を侵犯するものではないのである。対話関係は、そうした概念にとっかわり、それを関係という概念に吸収している。……

対話関係は哲学の諸問題を言語のうちに、より正確にいえば、もろもろのテキストの相関関係としての言語のうちに位置づける。そういう言語は、アリストテレス的ではない論理、連辞的、相關的、「カーニヴァル」的論理とともになされる、読む－書くの一对として存在するのである。……

対話が想定している二つの極のあいだに形成される軌跡は、因果関係、合目的性などの問題をわれわれの哲学の領野から徹底的に取り除き、小説よりもずっと広大な思考空間にとっての、対話原理の有用性を暗示している。対話関係は、おそらく二項対立以上に、現代の知的構造の土台となることであろう。（クリステヴァ、1983, pp.100-102/1969a）

### 3 ポリローク

クリステヴァ (1999/1977) は、対話を多声的に拡張した「ポリローク (polylogue)」という新語を作った。ポリロークは、ル・セミオティック (原記号態: リズム, インタネーションなどことばとして表現されないもの) とル・サンボリック (記号象徴態: 言語において記号・意味のレベルにあるもの) の衝突から生まれる。

バフチンが小説のことばを重視したのに対し、クリステヴァ (1984/1969b, 1991/1974) が基礎におくテキストが詩的言語であることは、非常に重要である。詩は、ことば自体を無化し、論理を崩し、「うたう」働きによって共感的に交差する先鋭的テキストである。バフチンが考察した小説では、「自己」「他者」「ストーリー」などの概念は、まだ健在であった。詩的言語ではそれらは分裂して危くなり、「ことば」と「ことばにならないもの」との間で異質なものがうごめき、噴出し、ときに破壊し、ときに新しく生み出す運動体となる。

句読点を打たれず、韻律的に発音される文の存在理由は、詩でもなく小説でもないテキスト、リズムによって統一を粉砕すると同時に多数化するポリロークたるテキストの、総体 (集合) のなかにある。言表主体の運動態は、前一論理的なリズムから、あるいは論理の崩壊から、ひとつの多論理を作り出して、別の文章法を要求する。文を壊そう、という断固たる先入観があるわけではない。文は韻律的発音のなかに舞い上がり、それによって、文は保持されながらも、新しい原記号の装置のなかへと補給されるのである。……総体のリズムを、したがって語る主体の多=論理を捉えることによって初めて、逆に、(文的あるいは語彙的な) 下位の諸単位の諸々の意味を解き放つことができる。(クリステヴァ, 1999, pp.159-160/1977)

「多声テキスト間の対話」は、名詞的概念ではなく、テキストとテキストが対話し、新しいテキストを生成する動詞的概念である。また、この概念は、バフチンの概念を超える可能性をもつ。なぜならバフチンは、あくまで「作者」「主体」「他者」として生身の人間像

を考えたが、この用語は、かつて自明であったこれらの概念自体を疑っており、テキスト自体を生成的で多方向性をもつ運動体とみなしているからである。

### 4 ハイパーテキスト

今まで行ってきたテキストの生成的対話に関する議論は、コンピュータのデジタル技術メディアにおける「ハイパーテキスト (hypertext)」概念とむすびつく。ハイパーテキストとは、テキストの網の目で成立しており、インターネットの多種テキストの連鎖において、テキストをリンクによって異なった経路で移っていくことを可能にする、相互作用的で非順序的な文章のことである (Landow, 1996/1992)。ここでもテキストという用語は、広義のことばをさすので、音響、音声、画像、マップ、アニメーションなども含まれる。

ハイパーテキストは、「複雑で、変化を続ける、非定型な情報のためのファイル構造」(Nelson, 1981) である。その考えは「われわれが考えるように」、つまり人間の脳の連想のしかたをモデルにしたものである。それは、まだコンピュータがなかったところに、相互に連結し、閲覧できる、メメックスと名づけられた機械の構想からはじまった。

“ハイパーテキスト”という語で私が意図しているのは、非順序的なエクリチュール——分岐し、読者に選択肢を与え、インタラクティブな画面で読まれるのがもっともよい読み方であるようなテキストのことである。一般に受け止められているように、これはリンクで結びつけられたテキスト群のことであり、このリンクが読者に異なった経路を与えてくれるのだ。(Nelson, 1981; 訳はランドウ, 1996, pp.11-12 より)

山口 (1998) は、ハイパーテキストの最低要件として、次の3つをあげている。1) 複数のテキスト、2) 順番がない (自由に順序を選択できる)、3) 相互にリンクされている。

ハイパーテキストは、現在では WWW などでもふつうに利用されるものとなったが、保存とアクセス、テキストの相互リンクに使われるだけではない。それが、根本的に従来のテキストと異なるのは、順序をもたな

いこと、つまり一方向的に進行する従来の時間概念に基づく順序系列にしばられないで、自在に「はなれた」テキストにジャンプできることである。そして、時間的にも空間的にも「はなれた」無関係な文脈にあったテキストどうしを「むすぶ」結節点をつくる働きを自在にすることが可能になる。

古典的な物語（ストーリー）の定義は、「始め—中間—終わり」という時間概念とむすびついていて、ポリログやハイパーテキストは、ストーリーをもたない詩的言語に近いものである。時間系列にしばられないので、引用可能性は格段に自由になる。

このようにハイパーテキストでは、テキスト概念が根本的に変わるので、テキストの形式も、テキストの読み方も書き方もテキスト体験も変わる。たとえば、「引用」は、窓をいくつも併行してあけて部分的のぞき見る「トランスクルージョン」という概念になる。つまり、従来の移動概念では、「ある場所からある場所へ移動する」という名詞的な場所が基になっていた。このような移動によるリンクは、結節点は二項でダイアログ的である。しかし、テキストを実際に移動させなくても、同時に併行していくつもの「窓」を参照することが可能なトランスクルージョンであれば、ポリログ的なむすび方になる。テキスト同士が生き物のように自在に「交差」して、生きた「織物（テクスタイル）」が縦横に織られていくようなイメージである。

「トランスクルージョン」は、リンクとは根本的に異なり、他の文書へと移動するものではなく、いま見ている文書の中にある「窓」を通して、言及されている文書のある箇所をいわばのぞいて参照するというものです。紙媒体の文書であれば、それは「引用」にあたるものですから、ネルソンはこれを〈引用窓〉とか〈引用リンク〉と呼んでいます。……ネルソンは当初「インクルージョン」という言葉を用いたのではないかと思います。この行為は厳密に「含む」というよりは、そこに「通過」「移動」(=trans-)の要素が加わっていますから、その意味で、「トランスクルージョン」という語は、よりコンセプトにふさわしいものかもしれません。(山口, 1998)

手と読み手、つまり作者と読者の概念も、相互関係のしかたも変わる。作者とは、ハイパーテキスト（超テキスト）のことである。そのテキストは、ポリログ的にいくつもの多声テキスト（多読者）に出会って、いくつもの「むすび」としての結節点がつくられることで、多方向に引用され、新たなテキストが生成され、テキスト自体が移動していくのである。

ハイパーテキストと現代の理論は、また別の形で作者の存在を再編する。……テキストの作者を一個のテキストとして考えるという点で両者は一致を見るのである。……こういう概念の中で最も重要なものの一つは、作者・読者の自己を（印刷された）テキストとしてのみ扱うのではなくハイパーテキストとして扱うことを意味する。作家にとっては、自己は脱中心化された（あるいは中心を欠いた）コードの網目の形をとっており、この網目は別のレベルではまた別の中心のない網目における結節点として機能するのである。(ランドウ, 1996, pp.126-127/1992)

以上、Ⅲでは筆者の考える「多声テキスト間の生成的対話」概念を、現代思想のいくつかの用語を手がかりにして、筆者が従来から主張してきた「テキスト」「はなれる」「むすぶ」「両行」「生成」概念とむすびつけて考察してきた。

今後の方向として見えてきたのは、第1に、対話概念を多声テキスト間の対話に拡張することである。第2に、差異を肯定し、必ずしも否定や対立にならない「両行」する対話を考えることである。第3に、一次元の時間順序による因果関係ではなく、出来事の関係性を問うていくことである。第4に、差異化、遅延、隔たり、断片化など空間的・時間的に「はなれる」働きと、分化、引用、リンク、トランスクルージョンなどはなれたものを「むすぶ」働きによって、「生成」機能が生まれるしくみに注目することである。

ハイパーテキストの概念によって、テキストの書き

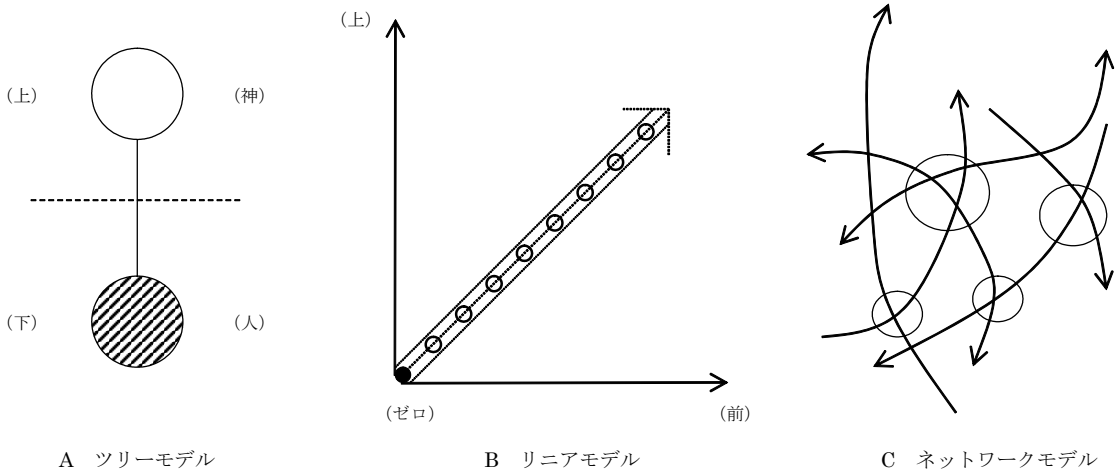


図1 世界観のモデルのイメージ

#### IV 世界モデルとしてのネットワークモデル

##### 1 ツリーモデル

最後にIVでは、今までの議論をもうひとつ大きな視野からとらえ、筆者がさまざまな文脈で論じてきた基本的な世界観や方法論と関連づけてみたい（やまだ, 1987, 1995 ; Yamada, 2004 ; Yamada & Kato, 2006a, 2006b など）。それらをモデルとして包括的にまとめたイメージを提示する。

モデルは「ツリーモデル」「リニアモデル」「ネットワークモデル」と名づけた3つにまとめ、表1に世界観の基本形と特徴を示した。図1は、その特徴を図示したものである。

A ツリーモデルは、アレクサンダー（Alexander, 1965）が「都市はツリーではない」で明らかにしたように、相互背反的分割や分岐、階層構造を特徴とするモデルである。古代ギリシアから西欧近代哲学までの代表的モデルのひとつで、普遍性と同一性と秩序をもつ静態的構造として世界をとらえる。

これはレヴィン（Lewin, 1936）が「アリストテレス的」と呼んだ思考法でもある。二元分割によるカテゴリー分類やタイプ分けによる質的方法が中心的操作で、

そのカテゴリーやタイプに属する「特性」や「性質」は、実体的な「本質」と考えられた。内向、外向などの性格類型論が代表例であろう。「自己」と「他者」、「主体」と「客体」の古典的な分類、二項対立的な対話も、もとはツリー思考に属する。

##### 2 リニアモデル

B リニアモデルは、線形上昇系列モデルである（Yamada, 2004 ; Yamada & Kato, 2006a）。レヴィンが「ガリレオ的」と呼んだ思考法でもある。ツリーモデルでは、世界は、あらかじめ与えられた実体的なもの、静態的で調和的構造、二元分割された絶対的価値としてとらえられた。それに対して、リニアモデルでは、世界は座標軸にあらわされるような動的な関数概念や力学的関係でとらえられる（Cassirer, 1979/1910）。

このモデルでは、世界は動的に変化するとみなすので、力関係によって世界を変えられる。その変化の法則は、原因と結果の関係、因果関係を明確にすることである。差異は、明確な境界で質的に分割されたものではなく、無限分割され無限に隣り合った一次元的連続量における量的な差にすぎない。絶対的な価値を付与されていた「金」に変わって、どこでも平等に通用する「貨幣」や「数量」の尺度によってものごとの価値が測られる。世界は連続量として一元化され、一方



表1 世界観のモデルと対話概念

| モデルと特徴       | A ツリーモデル<br>(分割と階層モデル)   | B リニアモデル<br>(線形上昇系列モデル)   | C ネットワークモデル<br>(生成的網目モデル)  |
|--------------|--|---|--|
| 1) 代表思想      | ギリシアー西洋 (近代) 哲学  | 近代 (モダン) 科学   | 現代 (ポストモダン) 思想   |
| 2) 空間と時間の構造  | 普遍的構造。世界や事物は、空間のなかで独立に普遍的に存在し、時間を通じて維持され、完結し秩序あるシステムとしての静的構造をもつ。                   | 動的構造。世界や事物は、一方向的な非可逆的時間、関数関係や牽引と反発の力学的な変化量として存在する。進歩と上昇に方向づけられた基準で、上昇と下降の組み変えが起こる。        | 多次元性と多方向性をもつ動的構造。世界や事物は、質の異なる多 <sup>ト</sup> 次元のな時的場所 <sup>ト</sup> に位置し、予測のつかない多方向の運動と出来事の変化が起こる。 |
| 3) 同一性と差異性   | 自己同一性は、完結性と普遍性をもち、明確な輪郭と固定的な形態をもつ個体や実体概念としてある。差異性は、同一性に従属し、境界によって相互背反的カテゴリーに分割される。 | 差異性は、等質で均質な連続量として、数量の大小や増減関係に還元される相対的概念である。原始的なものから高度なものまで、同一起源をもち、同一方向に向かって一次元的に進化・発展する。 | 同一性よりも、差異と反復による、生成・変化・移動する運動体やプロセスを重視する。固有性や意味は同一性と区別され、生成し変化する持続、交差する網目の結び目、出来事や物語として有機的に組織される。 |
| 4) 質と量       | 質的。質的な差異性は、境界によって明確に分割され、その質に固有の絶対的な価値と位置関係をもつ。                                    | 量的。等質な連続性をもつ数量によって、価値は一元的に測定される。  | 質と量の両行。質は、変化する動的関係性のなかでの結び目や出来事として、有機的統合をもつ。ローカルで多次元的な価値や意味(方向・感覚)が共存する。                         |
| 5) 基本操作      | 二元分割。二項対立。型(カテゴリー、タイプ)に「分ける」(分割、分類、分化)働き。対立項の比較と闘争。獲得と所有。                          | 実体概念から関数概念へ。微分や細分化による要素への還元と一元的連続量への変換。一方向的な因果関係。媒体(数値、貨幣、メディアなど)による代理操作の肥大化。             | 「はなれる」(移動、距離化、引用、散種)、「むすぶ」(対話、相互作用、結合、リンク)働き。多方向への柔軟な変化可能性をもつ、生きたテキスト間の対話と理解。物語の構成と再構成。          |
| 6) 自己と他者の関係性 | 自己の意識の自明性。個人としての自己と他者。自己が所有する特性。自己の同一性と永続性と完結性。                                    | 無意味な数値や記号媒体としての自己と他者。自他の境界の希薄化と限らない相対化。   | 物語(ナラティブ)として組織化される自己と他者。テキスト間の生成的対話。絶えざる引用とリンク。対話としての理解。   |
| 7) 対話と物語     | ダイアログ。二項対立。自己と他者の闘争的対話。始め、中間、終りの形態をもつ完結構造の物語。聖と俗、正と悪の二項対立物語。                       | 対話や物語概念の軽視。線形の一方向的時間系列で進行する歴史と物語。因果関係や目的手段関係や力関係の物語。                                      | 生成的対話。多言語、多次元、多声が共存する両行的対話。ポリローグ。「はなれた」場所のものを「むすぶ」ことで生成する物語。                                     |
| 8) 構造のイメージ   | ツリー構造(背反分岐をもつ階層構造)。ヒエラルヒー。神話。二元分割。幾何学図形。ピラミッド。コスモス(調和的秩序の統合体系)。                    | リニア・プログレッシブ(線形上昇)構造。スパイラル(螺旋)構造。無限分割。関数図式。座標軸。微分。力学。歴史的物語。因果関係。進化と進歩図式。                   | 網目構造。リゾーム(根茎)。インターテキスト。ハイパーテキスト。生成的物語。同時代ゲーム。トポロジー。脳ネットワーク。免疫システム。                               |
| 9) 象徴        | 幾何学, 神   | 数値, 貨幣  | テキスト, 生きもの   |

向的に前進・上昇する時間軸にそって「発展」「進化」する。

リニアモデルは、近代以降の自然科学や社会科学において中心的な位置をしめてきたもので、現代の心理学も依拠しているモデルである。

ここでいう因果律は、思考形式としての因果律であって、ものごとを原因と結果の系列として見るということである。天気が悪いときに、単に雨が降るというのを見ただけで、おしまいにしてしまえば、学問にはならない。雨はどうして降るのだろうか、その原因を考えていくところから、気象学という学問が生まれるのである。……けっきょくのところ、原因とか、結果とかいうものはないのである。ただ人間が、ある現象のつらなりを、原因結果的に見て、順序を立てるということにすぎないのである。(中谷, 1958, p.22)。

### 3 ネットワークモデル

C ネットワークモデルは、生成的網目モデルであり、多次元性と多方向性をもつ動的構造であり、それ自体が生成的な機能をもっている(やまだ, 1987)。このモデルは、網目や織物(テキスト)のほか、リズム(根茎, ドゥルーズ&ガタリ)、格子(ラティス, Alexander)、有機体(Whitehead, 1925)、物語(ナラティブ)、生態系(エコロジカル・システム)など、研究者によって多様な名前と呼ばれてきた。

ネットワークモデルでは、世界は、空虚なスペースとしての空間と時間という概念に二元分割されず、一体化された場所あるいは時<sup>トポス</sup>空<sup>クロトポス</sup>としてとらえられる。ものごとは、「因果関係」などの一次的な時間系列ではとらえられず、網目の結び目としての局在的<sup>ローカル</sup>場所で、「出来事<sup>イベント</sup>」として生起し、「物語<sup>ナラティブ</sup>」として編集される。「物語」は多様な方向<sup>センス</sup>(sense)に編むことができ、意味の差異を生み出していく。自己と他者は、二元分割された実体概念ではなく、物語的に組織される(やまだ, 2006b)。

### 4 ネットワークモデルにおける「多声テキスト間の生成的対話」

「対話」は、ツリーモデルでもネットワークモデルでも、どちらを基礎におくこともできるので、両者を区別することが重要である。図2は、ツリーモデルにおける「比較」と「対話」を示したものである。ツリーモデルでは、二元分割と二項対立が基本となる方法である。

①「二元分割」の基本操作を示している。二元分割とは、対象を二つのカテゴリーに分けることである。分けるためには、その境界を明確にする必要がある。そのために二つを区分する境界としての定義や基準が重要になる。カテゴリーには、そのカテゴリーに特有で固有な、所有される「特性<sup>プロパティ</sup>」「属性<sup>アトリビュション</sup>」「性格<sup>キョウケク</sup>」があると考えられるので、その特性を明確にする必要がある。カテゴリーは、基本的に同一性と永続性をもつ固定したものと考えられる。先に議論したように「今日の私は昨日の他人」「今日の虫は昨日の人間」のように自己同一性が変容するとしたら、そのカテゴリーの枠組自体が崩れてしまうからである。

②「比較」の基本操作を示している。二元分割した二つを対立させて、比較する。研究者である主体は、この二項のどちらにも属さず、中立の立場におり、二項はどちらも客体となる。比較法は、科学の基本でもある。実験法は、実験群と統制群の比較からなり、一対比較法は心理学の基礎実験で最初に学ぶ方法である。

③「対話」の基本操作を示している。二元分割した二つを対立させて、対話する。二項のどちらも主体となり客体となるので、主客が交替しうることが、対話的關係の特徴である。研究者は、二項のうちのどちらかに位置するので、相互作用が起こる。

「対話」概念は、伝統的には、A ツリーモデルにおける③「対話」の基本形をもとにしていた。それに対して筆者が基礎におくのは、C ネットワークモデルにおける「多声テキスト間の生成的対話」である。対話概念そのものがポリローグ的に大きく変質しているのである。人間もテキストの一種といえるが、生きたテキストである。つまり、動くテキスト、移動するテキスト、生成するテキストである。したがって、本来的

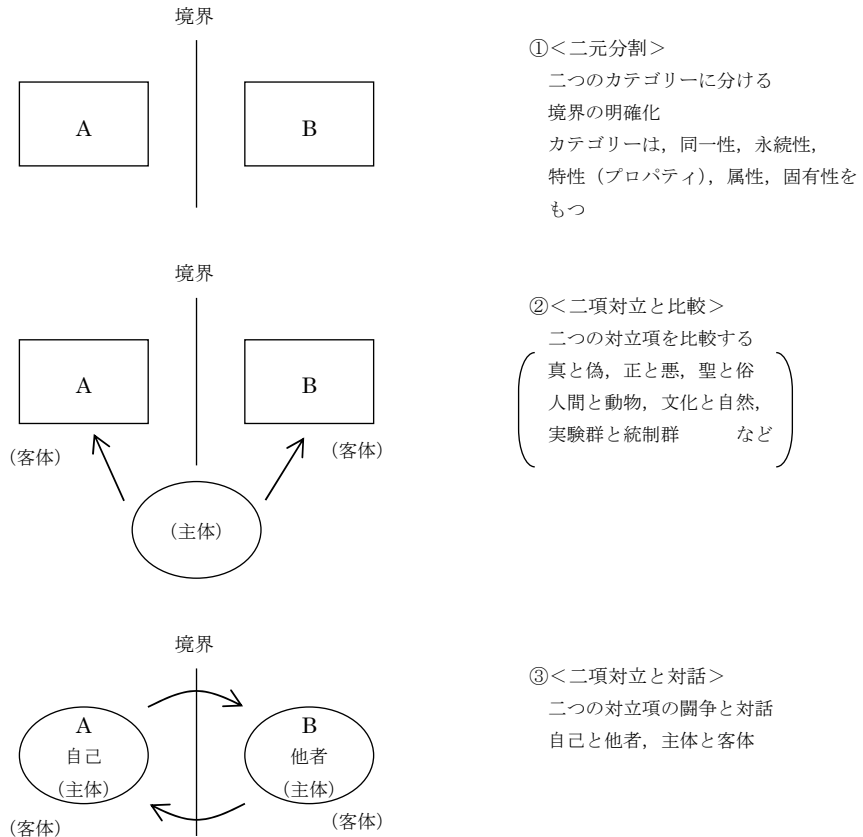


図2 ツリーモデルにおける基本操作と対話

に名詞形ではなく、動詞形であらわされる。多声テキスト間では、たえまなく「対話」が行われる。

ネットワークモデルでは、「むすび」が重要な働きをもつ。「自己」とは、実体的な同一性をもつ事物ではなく、物語的に組織される「有機的に組織された結び目（中核）としての生きたまとまり」であろう。

ネットワークにおける「むすび（結び・産び）」は、単なるモノの「リンク」「ジョイント」「コネクション」ではなく、「生成的むすび」「産み出すむすび」である。それは、機械的な接触ではなく、相手のネットを揺るがし、網目の組成を組む替え、意味の改変を迫るような対話的出会いなのである。

パフチンは、他者のことばとの出会いは、機械的な接触ではないと述べている。彼は、その接触のメタファーを「化学的化合」と呼んだ。筆者は、接触のメタファーはいのちある生きものの「むすび（結び・生す

び・産び）」にしたらどうかと考えている。たとえば、「結婚（男女二つの「性」のむすび）」「妊娠（卵子と精子の二つの「種子」のむすび）」「出産（出産と誕生による「親子」のむすび）」などのメタファーである。

コンテキストの中に含まれた他者のことばは、それがいかに正確に伝達されたとしても、一定の意味の改変を常に蒙るのである。……会話のコンテキストの中に導入された他者の言葉は、それを枠付けることばと機械的に接触するのではなく（意味と表現のレベルにおいて）化学的な化合をおこすのである。（パフチン、1996, p.156/1975）

本論では、古典的なダイアログとしての対話と区別し、対話を生きものメタファーで考えるために、「生成的対話」と呼ぶことにした。それに伴って、長

年使ってきた「モデル構成」という用語を「モデル生成」に変えた。モデルは、生きものであるから、建築物のように「構成・構築 (construction)」することはできない。両親の対話的な出会いと「懐胎」的むすびによって、子どもを産む・子どもが生まれるように、「産出」「生成」するのである。生まれたモデルは、両親の遺伝子を受け継いでいるが、その配列は親の意図通りに「構成」できるものではない。生成されたモデルは、いのちある生きもののように、親の意図から離れて自律して動きはじめるだろう。

### おわりに——線形的時間概念からの離脱

以上、本論ではネットワークモデルにもとづく「多声テキスト間の生成的対話」概念について議論してきた。最後に、本論の議論をいくつか一般的に応用することを考えてみよう。

まず第1に、一次元的時間で進行する線形思考法を見直すことが考えられる。順序立てて、段階をふんで上位に行く、リニア・プログレッシブ (線形上昇) 思考法からの離脱である (Yamada, 2004 ; Yamada & Kato, 2006a, 2006b)。

たとえば論文は、「目的」「方法」「結果」と一方向的順序で書かれてきた。実際には線形で研究が進行しなくても、その順序で書かねばならなかった。まして、連想から連想に飛躍する論文や、引用だけで新しい論を提出する論文は書くことができなかった。新しい生成的対話テキストとしての論文は、自由連想のような広がりななかで、いくつかの新しい「むすび (結び・産び)」を生み出すようなものも可能だろう。

第2に、旧来の書物や物語のもつ、線状に一次元的時間で進行する時間概念や順序性の制約からの離脱である。

これは「書物」「物語」という用語を捨てることではない。テキスト概念が変わるように、「書物」や「物語」の概念自体が変わるからである。すでに私たちは、電子ジャーナルなど旧来とは異なる形の「書物」を読んでいる。また、やまだ (2000) は「物語」を、「時間順序を重視する定義」「始め—中間—終わり

の形態を重視する定義」から、「二つ以上の出来事をむすびつける」という定義に変えている。

第3には、「テキスト」「引用」「読む」「書く」という概念が変わることである。

遠くに離れて別次元の文脈にあった複数のテキストを検索機能でリンクし、原典にまるごとあたらなくても「引用窓」を同時に開けて、複数の断片テキストを相互参照する「トランスクルージョン」は、出会いと引用の自由度を高める。しかし、原典をじっくり読まない安易な引用の乱用をもたらす弊害も起こる。

多声テキストとどのように生成的に対話するか、それは発想法としても研究法としても、ますます重要になる。同じ引用でも、その隣にどのような引用を置くかは、「対話」の問題である。それによって意味が変わるから、有機的な「むすび」としての連結のしかたが問われるだろう。

第4には、引用の自由度が増すと、テキストはどこまで「他者」のもので、どこまで「自己」のものか、見わけがつかなくなる。本来的に「ことば」というものは、「私のものでない借りもの」であるが、「自己」「他者」、オリジナルな著作を創る「作者」という概念は、さらに霧散し拡散していくだろう。

しかし、それらの概念が変容することは確かだが、それらの用語が不要になるわけではない。多様なテキストが氾濫し、誰でも容易に多声テキストに平等にアクセスできる状況になるほど、質の高い信頼できるテキストを見分ける選択作業と、それらを生成的にむすぶ「対話」と、それらを有機化する「物語」は、ますます必要になる。「物語」とは、「経験をオーガナイズする意味化行為」であるが、そのような新しい意味における「物語作者」、つまり引用と編集の達人、意味の生産者、テキストのプロデューサーとしての作者の役割は、かえって増大すると考えられる。

以上のように本論は、質的研究の方法論の基礎としてだけでなく、さらに広く現代社会の未来を展望し新しいものの見方を生みだしていく議論に役立てられるだろう。

### 引用文献

Alexander, C. (1965). A city is not a tree. *RUDI Classics or*

- Files on 'A City is not a Tree' by Christopher Alexander.*  
<http://www.rudi.net/pages/8755> (情報取得 2007/03/01)
- 東浩紀. (1998). 存在論的, 郵便的——ジャック・デリダについて. 東京: 新潮社.
- バフチン, M. M. (1995/1963). ドストエフスキーの詩学 (望月哲男・鈴木淳一, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- バフチン, M. M. (1996/1975). 小説の言葉 (伊東一郎, 訳). 東京: 平凡社 (平凡社ライブラリー).
- バフチン, M. M. (1988). ことば 対話 テキスト (ミハイル・バフチン著作集 8) (新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社.
- カッシーラー, E. (1979). 実体概念と関数概念——認識批判の基本的諸問題の研究 (山本義隆, 訳). 東京: みすず書房. (Cassirer, E. (1910). *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchungen über die Grundfragen der Erkenntniskritik*. Berlin: B. Cassirer.)
- ドゥルーズ, G. (1992). 差異と反復 (財津理, 訳). 東京: 河出書房新社. (Deleuze, G. (1968). *Différence et répétition*. Paris: Presses Universitaires de France.)
- ドゥルーズ, G. (2000). 差異について (平井啓之, 訳). 東京: 青土社. (Deleuze, G. (1956). *La conception de la différence chez Bergson. Les études Bergsoniennes Vol. IV, 77-112*. P.U.F.)
- ドゥルーズ, G. (2007). 意味の論理学 (上・下) (小泉義之, 訳). 東京: 河出書房新社 (河出文庫). (Deleuze, G. (1969). *Logique du sens*. Paris: Les Éditions de Minuit.)
- ドゥルーズ, G., & ガタリ, F. (1994). 千のプラトー (宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明, 訳). 東京: 河出書房新社. (Deleuze, G., & Guattari, F. (1980). *Mill plateaux*. Paris: Les Éditions de Minuit.)
- デリダ, J. (1977, 1983). エクリチュールと差異 (上・下) (上/若桑毅・野村英夫他, 訳, 下/梶谷温子・野村英夫他, 訳). 東京: 法政大学出版局. (Derrida, J. (1967a). *L'écriture et la différence*. Paris: Éditions du Seuil.)
- デリダ, J. (2000). ポジション 新装版 (高橋允昭, 訳). 東京: 青土社. (Derrida, J. (1972). *Positions*. Paris: Les Éditions de Minuit.)
- デリダ, J. (2001). たった一つの, 私のものではない言葉——他者の単一言語使用 (守中高明, 訳). 東京: 岩波書店. (Derrida, J. (1996). *Le monolinguisme de l'autre: ou la prothèse d'origine*. Paris: Galilée.)
- デリダ, J. (2003). 火ここになき灰 (梅木達郎, 訳). 京都: 松籟社. (Derrida, J. (1987). *Feu la cendre*. Paris: Éditions des femmes.)
- デリダ, J. (2005). 声と現象 (林好雄, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫). (Derrida, J. (1967b). *La voix et le phénomène*. Paris: Presses Universitaires de France.)
- エリクソン, E. H. (1977, 1980). 幼児期と社会 I・II (仁科弥生, 訳). 東京: みすず書房. (Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York; London: W.W. Norton.
- 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士 (編). (1998). 岩波哲学・思想事典. 岩波書店.
- ハイデガー, M. (2003). 存在と時間 1・2・3 (原佑・渡邊二郎, 訳). 東京: 中央公論新社 (中公クラシックス). (Heidegger, M. (1927). *Sein und zeit*. Halle: Niemeyer.)
- Holquist, M. (1990). *Dialogism: Bakhtin and his world*. 2<sup>nd</sup>. London: Routledge.
- カフカ, F. (1962). 城; 変身——世界文学全集 29 (原田義人, 訳). 東京: 河出書房新社.
- 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一 (編). (1994). 現象学事典. 東京: 弘文堂.
- クリステヴァ, J. (1983). 記号の解体学 セメイオチケ 1 (原田邦夫, 訳). 東京: せりか書房. (Kristeva, J. (1969a). *Semeiotiche: recherches pour une semanalyse*. Paris: Editions du Seuil.)
- クリステヴァ, J. (1984). 記号の生成論 セメイオチケ 2 (中沢新一・原田邦夫・松浦寿夫・松枝到, 訳). 東京: せりか書房. (Kristeva, J. (1969b). *Semeiotiche: recherches pour une semanalyse*. Paris: Editions du Seuil.)
- クリステヴァ, J. (1985). テキストとしての小説 (谷口勇, 訳). 東京: 国文社. (Kristeva, J. (1970). *Le texte du roman. Approche sémiologique d'une structure transformationnelle*, La Haye, Mouton.)
- クリステヴァ, J. (1991). 詩的言語の革命 (原田邦夫, 訳). 東京: 勁草書房. (Kristeva, J. (1974). *La révolution du langage poétique*. Paris: Éditions du Seuil.)
- クリステヴァ, J. (1999). ポリローグ (足立和浩・沢崎浩平・西川直子・赤羽研三・北山研二・佐々木滋子・高橋純, 訳). 東京: 白水社. (Kristeva, J. (1977). *Polylogue*. Paris: Éditions du Seuil.)
- 桑野隆. (2002). バフチン 新版——〈対話〉そして〈解放の笑い〉. 東京: 岩波書店.
- ランドウ, G. P. (1996). ハイパーテキスト——活字とコンピュータが会おうとき (若島正・板倉巖一郎・河田学, 訳). 徳島: ジャストシステム. (Landow, G. P. (1992). *Hypertext: The convergence of contemporary critical theory and technology*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.)

- Lewin, K. (1936). *Principles of topological psychology*. New York: McGraw-Hill.
- ロッジ, D. (1992). バフチン以後——〈ポリフォニー〉としての小説 (伊藤誓, 訳). 東京: 法政大学出版局.
- (Lodge, D. (1990). *After Bakhtin*. London: Routledge.)
- 中谷宇吉郎. (1958). 科学の方法. 東京: 岩波書店 (岩波新書).
- Nelson, T. H. (1981). *Literary machines*. Swarthmore, Pa.: Self-published.
- ニーチェ, F. (1993). 権力への意志 下 (原佑, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫). (Nietzsche, F. (1901). *Der wille zur macht. Nietzsches Werk10*. Taschen Ausgabe.)
- 西川直子. (1999). クリステヴァ——ポリロゴス. 東京: 講談社.
- ソシュール, F. (1972). 一般言語学講義 (小林英夫, 訳). 東京: 岩波書店. (Saussure, F. (1922). *Cours de linguistique générale. 2 ed*. Paris: Payot & Cie.)
- トドロフ, T. (2001). ミハイル・バフチン 対話の原理 (大谷尚文, 訳). 東京: 法政大学出版局. (Todorov, T. (1981). *Mikhail Bakhtine: Le principe dialogique*. Paris: Éditions du Seuil.)
- Vygotsky, L. (1962/1934). 思考と言語 (上・下) (柴田義松, 訳). 東京: 明治図書出版.
- ワーチ, J. V. (1995). 心の声 (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子, 訳). 東京: 福村出版.
- (Wertsch, J.V. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.)
- ホワイトヘッド, A. N. (1981). 科学と近代世界 (上田泰治・村上至孝, 訳). 京都: 松籟社. (Whitehead, A.N. (1925). *Science and modern world: Lowell Lectures, 1925*. New York: Macmillan.)
- 山口裕之. (1998). デジタル技術時代のテキスト(3)——ハイパーテキストとテキスト. インターネット講座「メディア・情報・身体——メディア論の射程 12 回」 [http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/yamaguci/inet\\_lec/lec12/98med12.html#intertext](http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/yamaguci/inet_lec/lec12/98med12.html#intertext) (情報取得 2007/03/08)
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめざす現場 (フィールド) 心理学の方法論 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51. (やまだようこ (編). (1997). 現場 (フィールド) 心理学の発想. 東京: 新曜社. pp.151-186.)
- やまだようこ. (1987). ことばの前のことば——ことばが生まれるすじみち 1. 東京: 新曜社.
- やまだようこ. (1995). 生涯発達をとらえるモデル. 無藤隆・やまだようこ (編). 生涯発達心理学とは何か——理論と方法 (講座生涯発達心理学 1). pp.233-245. 東京: 金子書房.
- やまだようこ (編). (2000). 人生を物語る——生成のライフストーリー. 京都: ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2002). 現場 (フィールド) 心理学における質的データからのモデル構成プロセス. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- Yamada, Y. (2004). The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity. de St. Aubin, E., McAdams, D.P., & Kim, T. C. (Eds.), *The generative society: Caring for future generations*. (pp.97-112). Washington DC: American Psychological Association.
- やまだようこ. (2006a). 非構造化インタビューにおける問う技法——質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス. 質的心理学研究, 5, 194-216.
- やまだようこ. (2006b). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己. 心理学評論, 49, 436-463.
- Yamada, Y., & Kato, Y. (2006a). Images of circular time and spiral repetition: The generative life cycle model. *Culture & Psychology, Vol.12(2)*, 143-160.
- Yamada, Y., & Kato, Y. (2006b). Directionality of development and Ryoko Model: Reply to four comments. *Culture & Psychology, Vol.12(2)*, 260-272.
- やまだようこ. (2007a). 質的研究における対話的モデル構成法——<sup>リフレクシヴ</sup>多重の現実, ナラティブ・テキスト, 対話的省察性. 質的心理学研究, 6, 174-194.
- やまだようこ. (2007b). 喪失の語り——生成のライフストーリー. 東京: 新曜社.

(2007.3.31 受稿, 2007.7.24 受理)